北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

平成22年 8月

第１９号（平成22年８月）　　目　　次

1	長編記録映画「セレベス」誕生の経緯	脇田　清之	2
2	海洋民族ブギス・マカッサルの海	脇田　清之	9
3	セレベス民政部時代の思い出	粟竹　章二	23
4	国酒（日本の酒）泡盛 －　泡盛と地域活性化をかんがえる　－	上田不二夫	34
5	エチオピアについて（その４）	石野　　赫	40
7	ビトゥンの水産事情	長崎　節夫	42
１０	会員名簿		46
１１	編集後記		48

平成22年2月25日

勝田清之

長編記録映画「セレベス」誕生の経緯

太平洋戦争の時代に製作された長編記録映画「セレベス」が６６年ぶりに上映され話題となった。川崎市民ミュージアム所蔵の記録映画「セレベス」構想（計画案）を読み、当時のセレベスにおける日本人について探ってみたい。

１）旧日本海軍のセレベス侵攻から日本軍政初期のあらまし

旧日本海軍特別陸戦隊は昭和１７（１９４２）年1月１１日未明に、ミナハサ半島東岸のケマに上陸、同じ１１日午前４時２０分には西岸メナドにも上陸した。さらに同じ１１日午前９時３０分、堀内豊秋海軍中佐の率いる海軍落下傘部隊第一次降下隊の３２３名（２８機）がトンダノ湖畔のランコアン飛行場に降下、メナドを中心とするミナハサ地域の蘭印軍を制圧した。ケマ敵前上陸部隊は１６９名、マナド上陸部隊は８４名と記録されているのにたいして、落下傘部隊の３２３名は圧倒的に多い兵力であった。翌１２日には園部竹次郎特務中尉以下１７３名の第二次降下隊が降下している。

旧日本軍の落下傘部隊については陸軍が１月１５日にパレンバンに降下している。作戦上陸海軍落下傘部隊の降下は、陸海軍が同時に発表することになっていた。しかし陸軍が抜けがけに、また大々的に発表したので問題になったと云われている。

旧日本海軍特別陸戦隊はその後スラウェシ島の東海岸を南下して、１月２４日には蘭印空軍基地のあったクンダリ（現在の東南スラウェシ州）に上陸、２月９日にはマカッサルの南方約３０キロにあるアエンバトバト海岸に上陸し、同日の昼１２時半にはマカッサル市街を、また同日深夜にはマロスの飛行場を制圧した。アエンバトバト海岸を上陸地点に選んだのはマカッサル港が機雷で封鎖されていたためとされている。２月８日には一等駆逐艦「夏潮」がマカッサル攻略作戦中に敵潜水艦の攻撃を受けて沈没している。

旧日本陸軍がジャワ島に上陸したのが３月１日と記録されているので、それに較べて旧海軍によるセレベス島上陸はかなり早かった。２月９日にマカッサルへ入ったあと、２月２８日には現地住民向けの簡易日本語学校の開設、３月１０日には民政部が設置され、４月下旬には市役所が開設されている。南洋貿易会社の山崎軍太氏がマカッサル市長に就任し活躍することになる。短期間に広大なセレベス島全土を統治するために地元民と多くのの接点を持つ民間商社の

人材が数多く投入・活用されていることが窺われる。

２）記録映画「セレベス」の製作の経緯

太平洋戦争緒戦の勝利で日本中が沸き立っていた時期であった。日本の本州の８割もあるこの大きなセレベス島を、これからどうやって統治していくか、その為には多くの優秀な人材を日本から送り込む必要があった。こうした中、長編記録映画「セレベス」製作の構想が持ち上がった。大本営海軍報道部の監修の下に製作する映画の目的は新たに日本の占領地となったセレベス島がどのような土地であり、その土地に住む人々の様子や習俗などを内地に紹介することであった。映画監督は秋元憲氏が選任された。記録映画「セレベス」構想の書類の裏に昭和１７・５・２２と記されているので、計画書の作成は１７年の４月から５月にかけての間と思われる。その後の昭和１７年後半から昭和１８年初めごろにかけて、マナド、クンダリ、マカッサル、パレパレ、トラジャなどセレベス島各地で撮影が行われている。マナドの落下傘部隊の様子など一部ニュース映画の映像も取り込まれているが、その後、どこで編集作業が行われたのか現時点では明らかでない。ＢＧＭとしてインドネシア・ラヤ（現在のインドネシア国歌）が効果的に使われている。この映画は 1944 年 7 月 27 日に一般公開された。

この時期同じ海軍のプロパガンダとして製作された映画にはアニメ映画「桃太郎　海の神兵」がある。こちらも昭和１７年１月１１日のメナドの落下傘部隊の将士の談話をベースにしたもので、こちらは子供向けの海軍ＰＲ映画である。

この映画が企画された直後、昭和１７年年６月には太平洋ミッドウェイ海戦で日本海軍が大敗し、アメリカの本格反撃が始まるが、情報は管理され、悪いニュースはまったく日本の国民には伝えられなかった。今から考えれば、あれは、つかの間の夢物語であったようにも思える。

３）長篇記録映画「セレベス」６６年ぶりの上映

２０１０年１月９日から１１日の３日間、川崎市民ミュージアムで長篇記録映画「セレベス」が６６年ぶりに上映された。きっかけは２００４年に本作の監督である秋元憲氏のご令息である秋元翼（たすく）氏が当時のフイルムを映画・ビデオなどのメディア芸術作品の収集展示などを特色とする川崎市市民ミ

ュージアム（神奈川県川崎市中原区等々力1-2）に寄贈されたことである。ミュージアム側は、秋元監督が戦前、戦後を通じて数多くのドキュメンタリー映画の製作に携わり、映画としての完成度が高く、文化人類学的資料としても大変貴重で、興味深い内容であると高く評価している。戦時中に制作されたフイルムであったため不燃化作業や劣化歪み修正作業などに年月を要し漸く今回の上映となった。

戦時中のセレベス島の情報はほとんどが戦後書かれた「想い出話し」であり、現地で作成された資料は皆無に近い。敵国スパイが暗中飛躍する当地では一般市民がラジオを持つことは禁止され、ましてや写真を撮ることは不可能であった。また終戦時には現地の軍政・民政に関する資料はすべて焼却処分されている。こうした中、海軍のプロパガンダ映画であるとは云え約3時間に近い日本軍政初期のセレベス島内各地の記録映像は大変貴重なものである。

4）記録映画「セレベス」構想　　海軍報道部作成

川崎市民ミュージアムに収められている表記の資料の全文を当時の仮名使いでご紹介する。しかし漢字については現在の字体を使っている。当時の映画製作責任者の意気込みが伝わってくる。

（本文）

一、　この映画の目的

（一）

セレベス　ー　今まで聞いたこともない島の名が、突如我々日本人の目の前に浮かび上がってきた。皇紀二千六百二年一月十一日、帝国海軍落下傘部隊のメナド降下を契機として。

一月十一日メナドを占領した帝国海軍は、同じく廿四日にはケンダリーに上陸、二月九日には早くもマカッサルに僅々数日の間に付近一帯を席巻した。

この映画は帝国海軍マカッサル占領後三ヶ月即ち昭和一七年五月から十月に至る約半年の間に亙るセレベス島の記録である。セレベス島とはどんな処か、そこを帝国海軍はどんなにして攻略したか、そして攻略後どんなにしてそれを日本的に再建して行ったか、――――　この映画はこれらの問題を内地の同胞に伝えると共に、併せて、この大事業を完成せんとしつつある我々

の姿を、長く子孫への贈り物として残さんとするものである。

（二）

セレベスは今まで余りにも内地に知られていない。否、内地ばかりか世界の学会にさへも未開の暗黒地として閉ざされてきた。全世界を通じてセレベスに関する文献は恐らく五本の指を折り切れぬ寥々たるものであるだろう。

それはオランダの秘密政策の結果であったかも知れない。だが、そのため、内地の人々は勿論世界の人々も、ここをアフリカやボルネオの奥地と同じく猛獣毒蛇の巣窟であり、鰐やマラリヤ蚊の跳梁地、甚だしきは人食い人種の世界だと思っている。

それも一つの夢の想像としては面白いかも知れない。だが、その為内地の為政者がセレベスへの認識を誤り、有能人士がセレベスへの進出をためらふようなことがあるとしたら由々しい問題である。だからこの映画は奇を衒はず、大衆の低い猟奇心にこびず、あるがままのセレベスをあるがままに記録し、内地為政者と一班国民に報告せんとするものである。

セレベスに関してはまだ何ごとも新しい。単にそこがどんな景色かと云ふことを伝えるだけでさへ決して無価値ではないだろう。だからこの映画は先ず海軍報道班員としての我々が見たままを記録し、より深い専門的な探求は次の仕事に譲りたい。だが少なくとも次の項目だけは絶対に記録して帰らなくてはならないだろう。そしてこの映画は大体六巻から八巻位の長さになる予定である。

二、　この映画の内容

（一）町と村

内地の人にとって先ず問題になるのは彼等が来て、とりあへず住まねばならぬ町と村の姿だらう。そして政治も経済もまた当然この町と村とを中心として考へられねばならない、だから我々はこの映画の最初に於いて、セレベスの町と村がどんなに開け、どこへ行っても電気と水道と道路と宿舎とがどんなに完備しているかを語るだろう。それによって内地人は帝国海軍の占拠したこの広大な島が、決してジャングルとマラリア蚊の手のつけられない未開地ではないことを知って驚くだろう。

セレベスに於ける中心都市としてはメナドとマカッサル、パレパレ（蘭軍潜水艦基地のあった処）とケンダリー等、小村としてパロポ、ワタンポネ等

が記録されねばならぬだろう。

（二）人

次に我々はこの島の民族に就いて語らうと思ふ。

一と口にインドネシアと云ってもその構成は複雑であり、これを十把一とからげに考え、扱うことは許されない。その各々が文化教養の程度を異にし、宗教を異にし、風俗、習慣、気風を異にする。だからこれらのことを充分心得た上、その各種族に就いて何が彼等を喜ばせ、何が彼等を悲しませるかを知ることは、今後彼等を支配し統治するものにとっては不可欠の知識であらねばならぬだろう。

又今後この島の産業を調べ、事業を企てんとする経済人にとっても、労働力としての彼等の能力や適応性はどんなであるか、彼らにあた興ふべき住居や衣食や作業姿勢はどんなであるべきか、休養や娯楽はどの程度に考慮したらいいか、等は当面必要な知識であり、配給経済のめんからもゆるがせにできない調査問題であらねばならぬ。

この映画に記録される彼らの生活の姿は当然これらの問題に対し最も明快な指針を興へる鍵となるだらう。

我々はこれらの問題をセレベスの四大種族　—北部ミナハサ族、中部　—トラジャ族、南部マカッサル及びブギス族　—の各々に就いて個々に調査記録したいと思ふ。

（三）　　セレベスと日本

現在の処、セレベスと日本と云うことはとりもなほさずセレベスと帝国海軍と云うことになる。セレベスが我々とこんなにも密接な関係をもつに至った抑々の機縁は、昭和一七年一月十一日、帝国海軍によるメナド占領に始まる訳であるが。————

我々はこの映画に於いて、帝国海軍が大東亜戦争全作戦の如何なる時期に、如何なる目的と方法とでこれを占領したか、そして占領直後　如何なる軍政を施いてどんなに治安を恢復し得たか、それらを記録し皇紀二千六百二年この島が日本の版図に帰した歴史的時点に於ける我らの姿を内地国民に、そしてそれ以上に我らの子孫に永く伝え残したいと思

ふ。

この為、セレベス作戦の跡、捕虜と蘭人の問題、ラジャーの処置、町の経済統制の姿、資源調査、インドネシアの日本語教育と日本人のマレー語講習、天長節に於けるインドネシア捕虜解放等はぜひ記録されねばならぬだろう。

三、　我々の作業日程

我々の仕事は本来調査と下見聞に少くとも半年から１年を費すのを常とする。然し戦時下であると云うことと占領直後と云う時期を捕へんとする必要上、このやうな万全な仕事の仕方は許されないであらうから、且つ見且つ撮るやうな方法もとらざるを得ないだらう。
このことは普通の場合より仕事の全期間を短縮させ得るわけであるが、又、反対に平時とは比較にならぬ連絡交通の不便の為予想外に能率の落ちることも考慮せねばならないわけである。これらすべてをにらに合わせた上次の程度の日程予想が大体当を得たものと思われるが、勿論我々は未だ現場を調査したわけでなく、この予想は極めて大ざっぱなものであり、とりわけ交通と天候によって動かされることは充分覚悟しなければならない。

一、マカッサルとその近郊　約１ヶ月間
一、メナドとミナハサー帯　約２ヶ月間（交通　調査　共）
一、　とらじゃーの部落　約１ヶ月間　（交通　調査　共）
一、諸地方　約１ヶ月間　（交通　調査　共）

以上

（裏表紙）

（昭和１７・５・２２）

参考資料

a）福岡良男著　軍医のみた大東亜戦争　暁印書房　２００４年５月７日
b）湊　邦三著　セレベス海軍戦記　興亜日本社　昭和１９年６月５日
c）下村部隊司令部　マカッサル案内　　川崎市市民ミュージアム所蔵

d）海軍報道部作成　記録映画「セレベス」構想　昭和１７年５月２２日
川崎市市民ミュージアム所蔵
e）スラウェシ島情報マガジン「セレベスの海底から」
http://www5d.biglobe.ne.jp/~makassar/mks/kasahara.html

f）粟竹章二　マロスの旧日本軍人墓碑　（旧日本海軍のマカッサル侵攻作戦の証跡を訪ねて）
http://www5d.biglobe.ne.jp/~makassar/mks/maros.html
g）加藤裕著　大東亜戦争とインドネシア　朱鳥社　２００２年9月３０日
h）海軍セレベス民政部の軍政　―草創期を中心に―
南方文化　第７輯　１９８０年１２月　天理南方文化研究会
i）スラウェシの寛大な海：祖父からの贈り物　　山崎　けい子
http://www5d.biglobe.ne.jp/~makassar/mks/yamazaki.html
j）アニメ映画「桃太郎　海の神兵」
http://www.youtube.com/watch?v=suRt7Dtdsmg

海洋民族ブギス・マカッサルの海

ソンバ・オプにあった大商業都市マカッサル

脇田　清之

現在のマカッサル市の中心地から約７キロ南、ジェネベラン河（Sungai Jeneberang）の河口に、かつてのゴワ王国首府跡、ソンバ・オプ（Somba Opu）城址がある。潅木の中に厚さ２０メートル、高さ７－８メートルの城壁が残されています。（写真１－１）今は鄙びて、とても想像し難いですが、１７世紀のころ、ここに面積１５００ヘクタールに及ぶ世界有数の大商業都市マカッサルがありました。当時マカッサルは東南アジアの８つの貿易港の一つとして、またスパイスの取引の中心としても知られ、市内にはポルトガル、オランダ、デンマーク、英国、パキスタン、アラブ諸国、スペイン、中国などの商館や外国人居留地が置かれた国際都市でした。

マカッサルはスラウェシ島南西部にある好戦的で人口の多いゴワ王国（酋長）と海洋交易を得意とするタロ王国（酋長）が同盟を結んで作った都市であり、両王国は姻戚関係にあり、ゴア部族から王が出て、タロ部族からは首相ないし日常業務の管理者が出るなど非常によく組織化されていたようです。[12-P288,356]

写真１－１　復元されたソンバ・オプ城址

ゴワ王国がいつ頃出現したのかは明らかではありませんが、１５世紀のころ、すでにゴワは農業王国として知られていました。ゴワには豊富な農産物があり、ゴワには農産物を求めて来るジャワやマルクの商人で賑わっていました。また同時にゴワはマカッサル商人の基地でもあり、彼等はゴワの農産物をマルクへ運び、帰途に香料をゴワへ持ち帰るので、

ゴワは香料貿易の中継基地にもなっていました。王宮は海岸から内陸に６キロ入ったスングミナサ(Sungguminasa)にありました。

一方、タロ王国は現在のマカッサル市街地の北を流れるタロ河の河口にあった小国ですが、商業港として早くから栄えていました。１４９０年代、国王のツニラブ・リ・スリワ(Tunilabu ri Suriwa)はジャワ、マラッカ、バンダへ航海に出ています。またフローレス島の占領を試みますが失敗に終わっています。[11]

南スラウェシには、貿易によってゴワ、タロ両国よりも栄えていた王国がいくつかありました。マカッサルの北方約５０キロにあるパンカジェネ(Pangkajene)は、東の山岳地帯から流れる河口にある美しい水郷地帯です。マカッサルが最盛期を迎える前の１６世紀から１７世紀にかけて、ここにシアン(Siang)王国が栄えました。シアンには１４９０年年頃から多くのマレー商人が移り住んでいましたが、１５１１年にマラッカがポルトガル人により奪取されたあと大きく発展し、１５４５年にポルトガル人がシアンを訪れたとき町の人口は４万人であったと言われています。[11] 一時期、ゴワ、タロ王国はこのシアン王国の勢力下にありました。シアンの他、南スラウェシにはバチュキキ(Bacukiki)王国、スッパ(Suppa)王国も商業港として栄えていました。場所は現在のパレパレの付近です。

シアン、バチュキキ、スッパなど港都の繁栄ぶりに刺激されたのかも知れません。１５２５年、ゴア王国第９代の王、トゥマパリシ・カロナ(Daeng Matanre Karaeng Tumapa'risi' Kallonna)は、これまで内陸部のングミナサにあった王宮をジェネベラン河の河口にソンバ・オプ城（Benteng Somba Opu）を建設し、これまでの農業国から国際商業国家としての道を歩み始めます。ゴワ王国は海洋交易を得意とするタロ王国（酋長）と同盟を結び、双子の王（酋長）、マカッサル王国として知られるようになります。その後マカッサル王国はシアン、バチュキキ、スッパなど貿易先進王国を征服しながら勢力範囲を拡大させていきます。その一方で、タロ王国時代の同盟国であるマロス(Maros)、ポロンバンケン(Polombangkeng)や、サルメコ(Salumeko)、ボネ(Bone)、ルウ(Luwu)王国など強力なブギスの諸国と相互友好条約を結び出す。

トゥマパリシ・カロナの息子のトゥニパランガ（Tunipalangga、第１０代ゴア国王)はジェネベラン河口に住むマレー商人に対し、彼等の敷地内に立ち入らないこと、マカッサルの法律による税を免除するなどの恩典を与え、マレー商人の定住を奨励したという。マカッサルのマレー人社会は順調に発展し、マカッサルは香料貿易の中継基地として発展します。[3]

やがてマカッサルは海洋貿易を通じて国際的な港へと発展し、各国の商館が進出してき

ます。前述のマレーの商人のほか、１５５９年にはポルトガル、１６０７年オランダ、１６１３年英国、１６１５年スペイン、１６１８年デンマークが進出し、テルナテ人町、ポルトガル人町、インド人イスラム教徒（ムーア人）町、デンマーク商館、英国商館などが出現します。主な商品はマルク諸島からの香料、東ヌサ・テンガラからの白檀などでした。

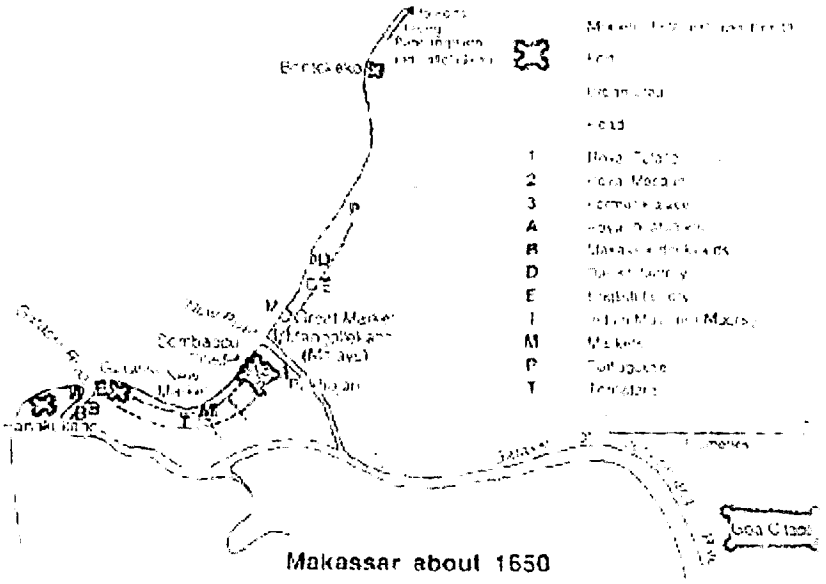


図１－１　１６５０年頃のマカッサル

Anthony Reid "Southeast Asia in the Age of Commerce" P82 [17]

左上点線は現在のジェネベラン河の河口デルタ地帯を示す。当時の海岸線に沿って４つの要塞が書かれている。南（左下）からパナクッカン要塞、ガラッシ要塞、ソンバ・オプ要塞、ボント・ケケ要塞、その６キロ先にウジュン・パンダン要塞、９キロ先にタロ要塞があります。

図１－２　オランダ人画家が描いた海からみた１６３８年頃のマカッサルの町並み

Anthony Reid "Southeast Asia in the Age of Commerce" P83 [17]

中央下にソンバ・オプ城、その周囲に大きな道路が配置されている。ヤシ並木の美しい道路だったようです。[17-P86]　右端の河がジェネベラン河（またはガラッシ河）の河口には沢山の船が描かれています。左端の河は新川、人工的に造られた河。ふたつの河の間の距離は約２キロ・メートル

１７世紀、オランダは香辛料貿易独占を企てたため、マカッサルはマレー人、ジャワ人、インド人、ポルトガル人、イギリス人、デンマーク人、スペイン人などすべての交易商人たちにとって重要な自由港になり、１６２０年代、マカッサルの町にはマレー人交易商人が数千人も住み、そのうち約６００人のマレー商人は、１６２４年に胡椒を集めにモルッカ諸島に出掛ける船隊に関わっていました。[12-P170]

１６４１年にポルトガル領マラッカがオランダにより占領されると、ポルトガルはマカッサルを重要拠点と位置づけて、マカッサルの役割は一層高まっていきます。マカッサルの町の南端、パナクッカン城の近くには造船所もありました。マカッサルの人達は技術を借用することに非常に貪欲で、ポルトガルの軍事的、歴史的、数学的テクストを読み、時には翻訳し、地図を使い、宮廷記録をつけるようになり[12]、またマカッサルの宮廷では、ヨーロッパの海図を非常に熱心に理解し写し取っていたことが記録されています。[12-P60]

この時期ポルトガル語がマレー語と並んで東南アジア海域での商業共通語として用いられていて、後にこの海域に他のヨーロッパ人が参入したとき、彼等はポルトガル語で迎えられたと言われています。[13-P52]　この時期ポルトガルからは軍事、海事、造船などの分野でかなりの技術移転があったことが想像されます。

当時、日本の商船も毎年マカッサルに来ていました。カンボジャ在住日本人の有力者、宗右衛門の船が１６３４年、１６３６年、１６３７年、１６３８年と殆ど毎年マカッサルまで渡航していたことが記録に残されています。また幾人かの日本人もマカッサルに駐在していたようです。[4]

図１－１はオランダ東インド会社（Vereenighde Oost Indische Compagnie、略称ＶＯＣ）との戦い（マカッサル戦争）が始まる１６６６年以前のゴワ王国が勢力を及ぼした地域を表す地図[10]です。この地図は現在マカッサルにあるゴワ王朝宮殿博物館（Museum Balla Lompoa, The royal palace of Gowa）にも飾られています。現在のカリマンタン島の東側、フィリピンのミンダナオ島近くのスールー諸島、東はマルク諸島、南はオーストラリアの北端に及びます。

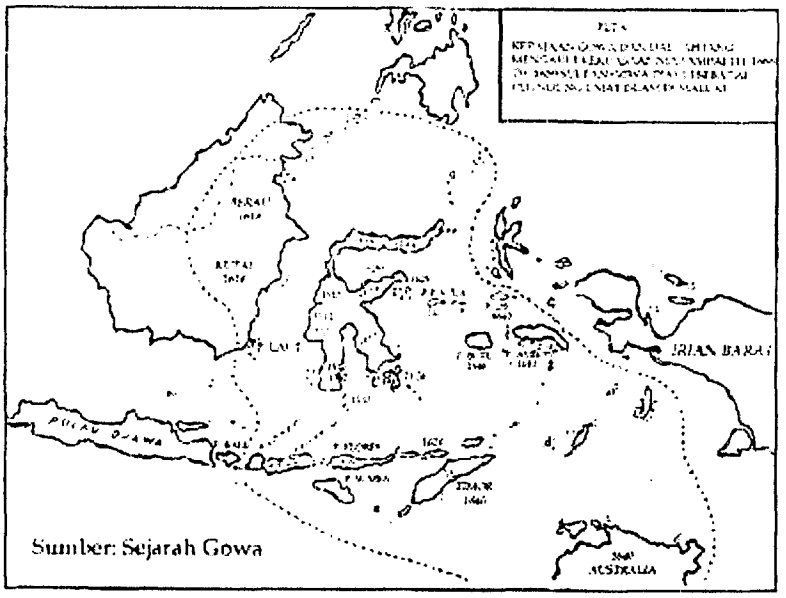


図１－１　１６６６年以前のゴワ王国の勢力圏[10]

香辛料貿易の独占を狙うオランダ東インド会社にとって、スペイン、ポルトガルなど他の欧州諸国の商人はライバルでした。従って世界各国との自由貿易を標榜し、東部の群島を支配するマカッサル王国は、オランダにとって大きな障害であり、脅威でした。オランダとマカッサル王国との間の緊張は次第に高まっていきます。１６５５年、マルク諸島のいくつかの海域でオランダ艦隊、マカッサル艦隊の間で戦闘が行われます。マルク諸島の玄関口にあたるブトンはすでにオランダによって占領されていましたが、ハサヌディン国王の指揮の元マカッサル軍が攻撃を仕掛け、オランダ軍は大きな被害を被ります。[10]

その後、VOC は、マカッサル王国と対立関係にあったボネ王国と連合してマカッサルを

攻撃することになります。この「マカッサル戦争」（１６６６－１６６７，１６６８－１６６９）によって、旧都マカッサルは徹底的に破壊されます。攻撃軍は多数のアンボン人やブギス人で編成され、ヨーロッパ人は少人数であったという。[15] この戦争によりVOCはマカッサルにおける貿易独占を確立し、オランダ人以外のヨーロッパ人は皆マカッサルから退去させられた。マカッサル戦争のあと、マカッサル港はオランダの独占的香料貿易のための施設へと変わり、かつての港の賑わいは失われて行きます。[1-p50] VOCはその穴埋めとして中国船のマカッサルへの誘致を計ります。その結果マカッサル商人は中国向け需要のナマコ、寒天、真珠、フカヒレ、ろう、そのほか甘草、金、奴隷などを調達に関わることになります。[1]

これでＶＯＣがマカッサル王国を征服したかにも見えますが、誇り高きマカッサルの貴族達は屈服してはいませんでした。これまでマカッサルを基地としていたブギス、マカッサルの商人達はマカッサルを離れ、オランダの手の届かないところへ基地を移し、活動が続けられます。

ブギス・マカッサル人が傭兵、商人、海賊として武装商船に乗ってマラッカに到来するようになるのは、これがきっかけだった。ブギス人の船には、王族、貴族の「冒険者」が４０－８０人ほどの家の子郎党を率いて乗り組んでいた。そうした武装帆船数十隻からなる集団が商人として東インド各地の港を訪れ、海賊として船を襲い、奴隷を狩り、またボルネオ沿岸、リオウ、リンガ諸島、マラッカ海峡などで傭兵としてマレー人の王たちの軍勢に参加した。そして１８世紀半ばともなると、そうしたブギス・マカッサルの冒険者のなかから、マラヤ西海岸、いまマレーシアの首都クアラルンプルにあるスランゴール王国のスルタンのように、新しい土地でみずから国を建てるものも出て来るようになった。（白石　隆著「海の帝国」）[2]

現在ソンバ・オプにある城壁は１９９０年頃に復元されたものです。

海洋民族ブギス・マカッサルの海（２）

ジャワ海を渡るブギス・マカッサルの武装商船隊

脇田　清之

１６世紀の時代、マカッサルの商人達は毎年のようにマラッカへ米、少量の金、香料を運んで、ポルトガル人と商取引を行っていたことが、１５５９年の記録に残されています。[11]

また１９世紀の初頭、マラッカに到来する船の中でブギスの武装帆船が圧倒的に多かったことが当時マラッカにいたトーマス・スタンフォード・ラッフルズ（１７８１－１８２６年）の記録に残されています。[2]

「かれらはマカッサル、東ボルネオのパシル、バンジャルマシン、さらにはバリ、セレベス島のマンダル、スンバワなどから武装帆船に乗ってやってくる。船は南西モンスーンのはじめにこれらの港を出発し、ボルネオ、ジャワ北海岸などの立ち寄ってはツバメの巣、香料、米、タバコなどを仕入れつつ、7月から10月頃、マラッカ海峡に到達する。かれらはマラッカではインド産綿布、アヘンなどを購入する。かれらはもちろんペナンまで行けばもっと安くアヘンを仕入れることができるのを知っている。しかし、マラッカ海峡では風が安定せず、また9月には北西の風が吹き始める。したがって、かりにマラッカからさらに北上してペナンに行こうとしても、その途中で風向きが変わってマラッカに引き上げざるをえないということが少なくない。こうした事情から、ブギス人の多くの船、とくに小型船は、はじめからペナンに行こうとしない。」[2]

その後、１８３０年代にも、それぞれ３０人くらいのブギス人、マカッサル人商人を乗せた２００隻以上の帆船が毎年７－１０月頃、南西モンスーンに乗ってシンガポールに到着し、１１月北東モンスーンの始まりとともにボルネオ、スラウェシへと帰って行った記録も残されています。[2]

ブギス人、マカッサル人の船は季節風に乗ってジャワ海を通ってマラッカへ出掛けていました。かつてジャワ海の覇権はジャワ島中東部を中心に栄えたヒンドゥー教王国、マジャパヒト王国（１３世紀末から１６世紀始め頃）が握っていましたが、１６世紀の後半になるとマカッサルに奪取されていきます。[1]　１７世紀の初頭、マカッサルはジャワ島の北側海岸の港町へも影響力を持つようになります。

（図 1-4）　１９世紀初めにブギス人が制作した海図

Anthony Reid "Southeast Asia in the Age of Commerce" P47 [17]

この海図には、ブギスの船の航路が詳しく書かれています。欧州で作成された一世紀前の海図をもとにマカッサルで作成されたもの。当時マカッサルで公正な貿易取引を行うための基準の整備に努力したワジョー国のマトア（首領）、アマンナ・ガッパ(Amanna Gappa)の基準に従った航路毎の運賃が書き込まれているとのことですが、この図面では読めません。

ジャワ海のみならず、古くから南スラウェシのブギス・マカッサル族の人達は自分たちの手で造った船で海を越え、現在のインドネシアの島々から遠く中国、フィリッピン、台湾、マレーシア、オーストラリア北岸、さらにインド洋を越えてマダガスカル、アフリカ南端の喜望峰まで進出していたと言われています。たしかに南アフリカ共和国にはマレー系の住人もいます。オランダの VOC が南アフリカへ入ったのが 1652 年ですから、ブギスの人達は自分の船で行ったのか、VOC の奴隷として行ったのか、またはメッカ巡礼との関わりなどはよく分かりません。

古くから彼等が乗っていた船は彼等自身で建造したパジャラ(pajalas) 型の船です。その後パジャラ型の船に欧州の帆装装置を取り入れた大型ピニシ (Pinisi, Phinisi, Pinisiq) や中型のバゴ (Bago) 、ランボ(Lambo) といった船に進化していきます。船の話は次の第 2 章で触れたいと思います。

マレーのサルタン（王族）の何人かはブギス・マカッサル出身者の末裔であり、現在においてもマレーシアには数世紀にわたって定住しているブギス・マカッサル人のグループがあります。またマダガスカルの言語はスラウェシの言語と同じオーストロネシア語に属し、例えば数字の 1 から 10 まで、マダガスカル語とインドネシア語はよく似ています。マダガスカルへ行ってインドネシア語で会話が成立したことはよく聞く話です。

ブギス・マカッサル人のふるさと南スラウェシは東部インドネシアの海域では最大の穀倉地帯です。勿論、農民もいるし漁民もいますが、海洋民族“パソンペ”（pasompe）と言われる人達は、島嶼間の交易を担う商人であり、また船乗りでもありました。彼等は大体５月から１０月の乾期には東風に乗って西に航海し、１１月から４月の雨期には西風を利用して故郷へ帰りました。先祖代々受け継がれてきた暦や海洋、気象の知識などの航海術を駆使して、数ヶ月にわたって東南アジア海域、さらにはインド洋海域を航海ましたが、船員であり商人でもある彼等は、商取引の成果物とともにスラウェシへ帰ってくるのです。彼等が使う船の建造技術も先祖代々受け継がれ、またその技術も時代の変化とともに進化してきました。

１年の内の大半を船の上と異境の地で暮らす生活のため彼等は「出稼ぎ人」(Perantau)と呼ばれていました。しかし 17 世紀後半から 18 世紀前半にかけて、オランダの東印度会社が貿易の支配力を強めると、彼等「出稼ぎ人」の勢いは次第に衰えていきます。太平洋戦争の時代には、島嶼間を行き来する彼等の船の大半は連合軍の空爆などによって失われてしまいました。

大戦後国際情勢は大きく変化します。東南アジア諸国が相次いで独立、これまで自分たちの庭先のように船を走らせていた海上にも国境線が敷かれ、往年のような活動は次第に出来なくなってきました。しかし現在においても、彼等のピニシ、ランボなどと呼ばれるハンディサイズの木造船はインドネシアの島嶼間の物流に一定の役割を果たしています。インドネシア国内の多くの島々のうち、いまだ港湾施設の整備されていない島々、スラウェシ島のような大きな島でも外部との交通手段を木造小型船に依存する地域は多数あります。砂浜に乗り上げができ、また小回りのきく小型木造船の需要はまだまだ続くように思われます。現在もスラウェシ島では木造船の建造も盛んに行われています。

３．航海のための組織

当時彼等はどのような組織、体制で航海を行っていたのでしょうか。ブギス・マカッサルの海洋民族のことを、ブギス語でパソンペ（pasompe）、マカッサル語でパソンバラ(pasombala) と呼びます。時代の流れの中でパソンペの業務形態も進化が見られます。戦後かつての帆船の時代からエンジンを搭載した機船の時代に入り、彼等の大型木造船ピニシや若干小型のランボの建造技術も変わってきています。当時のパソンペの航海のための組織は概略以下のとおりです。[6]

１）船に乗組むのは船主、船長と乗組員です。船主をポンガワ（ponggawa）と言い、船長がナコダ(nakhoda)、と乗組員はサウィ(sawi) と呼ばれます。航海術に精通した船主であれば、船主は船長の役割も果たします。

2）船長は乗組員のリーダーであり、航海中は船舶、貨物、乗組員の安全に対する責任を負います。

3）乗組員は４つの地位に分類できます。即ち、ａ）常雇いの乗組員（sawi tetap）、ｂ）臨時の乗組員（sawi bebas）、ｃ）乗客の乗組員（sawi penumpang）、ｄ）臨時の乗客の乗組員（orang yang menumpang）、です。この中で、一般的には最初の３つの「乗組員」が正規の乗組員として認められています。

全ての乗組員は乗船費用を負担し、航海を遂行するため協力しなければなりません。サービスを受ける立場の乗組員はいません。すべての乗組員は商人であり、各自が自分の商品を持っています。必ずしも同じ村の出身である必要はありませんが、パソンペの中での結束が求められています。そこで一般的には船主は自分の親族の中から船長を選び、同様に船長は自分の親族から乗組員を選ぶことが習わしとなっているようです。

航海中の安全第一の考え方から乗組員全員の役割が定められています。例えば船長の役割、舵手の役割、船首部の見張りの役割などです。船内での役割分担は船の構造によっても変わってきます。例えば、船首部、船体中央部、船尾部と場所によって担当を配置することもあります。船内を一つの村のように考え、船内の人間関係には村の人間関係が持ち込まれます。

４．伝統的なブギス・マカッサルの航海術

当時、航海に必要な海事知識としては、暦の知識、風の知識、星座の知識、海洋の知識などがありました。[6]

（１）暦の知識

暦の知識のなかで吉日、凶日は大変に重要で、これはカマリア歴が基礎となっています。一ヶ月の中で第１日、第３日、第９日、第１９日、２９日の夜、最後の水曜日とイスラム教ムハラム月の第１日、この７日は船の起工や出航をしてはならないとされています。こうした凶日を除外した一日の中でも、やって良い時間帯、やってはいけない時間帯が、夜明け前、朝、正午、正午過ぎ、午後に分けて決められています。例えば、金曜日の夜明け前、および月曜日の午後に旅行などに出掛けてはいけないとされています。

暦は時代の流れとともに、少しずつ変化、合理的になってきていますが、現在でも結婚式、建築物や船舶の起工式、田植え始めの日、商売の開始日など暦をもとに決められています。

（２）風の知識

スラウェシ島周辺の海域では５月から１０月にかけて東または東南からのそよ風で好天

が続きます。一方１１月から４月にかけては西風が吹き雨の多い季節になります。ブギスの航海者にとっては、この２つの風向きは大変重要な意味を持っています。航海者は５月から１０月の乾期には東風に乗って西に航海し、１１月から４月の雨期には西風を利用して故郷へ帰ります。

（３）星座の知識

当時の星座の知識による嵐や雨、雷の予測には次のような例があります。

1）　スロ・バウィ星（Bintang Sulo Bawi)が東に出て夜早く沈むと東風が吹く兆候です。
2）　ワラ・ワラ星（Bintang Wara Wara）が天空中央に明るく輝いて見えると熱暑が近い兆候です。
3）　３つの星からなるタンラ星座（Bintang Tanra）は嵐の兆候です。
4）　６つの星からなるマヌ星座（Bintang Manu)は乾期の中半であることを示します。
5）　７星のウォロンポロン星座（Bintang Woromporong)が東に出れば乾期の始まりとなります。
6）　６星のランバル星座（Bintang Lambaru）が東に出ると雨期の到来を示しています。
7）　３星のテルテル星座（Bintang Tellu Tellu）は北から南に向かって同じ高さに並び、西行き、またはその逆行の案内となります。

残念ながら現時点では彼等が使っている星座、星のパターンの名称に対応する英語名、日本語名は分かりません。

彼等は昼間、東から西へ移動する太陽の軌跡も参照していますが、どちらかと言えば、昼間の太陽よりも夜の星座の方を重要視しているようです。午後夕暮れ前に出航し、しばらくの間、陸地の目標地点と星を同時に観測、照合出来る状態で航海し、夜間の航海に備えるようです。「目標とする星が雲で隠れていても、まったく心配はいらない。」「隠れていない無名の星のパターンで船の針路を判断できる。」と言います。最近ではインドネシア政府から磁気コンパスの設置を義務づけられていますが、ランプをつけなくては読めないコンパスより、暗くても見える星の方が良いとコンパスの評価は今一つのようです。

（４）海洋に関する知識

当時の海洋に関する知識のなかで、光、音、臭いなどで陸地、浅瀬などの危険を予測するための知識には次のようなものがあります。

1）　海面上で光が水平方向に、または上向きに光る場合は強風の前兆である。
2）　船首方向に黒い雲が現れ、急速に明るくなるのは間もなく強風が吹き危険が迫る前兆である。
3）　腐敗臭のする風とともに、黒い雲の塊、その下に尾を引き、海面に陰を落としてい

る場合には突風の兆候であり乗組員は警戒態勢に入らなければならない。

4）　舵がガタガタ音を立てている場合には先に浅瀬や岩礁がある兆候である。

5）　薄暗く曇った月夜のなか、油を流したような静かな海面に緑色または青色の光が見える場合、そこには危険な大蛸がいるので、船を変針させ危険を回避すること。

6）　明るい月夜の中に光を放って見える、また日中に白く見え、腐敗臭がする場合、暗礁の可能性があるので、直ちに船を変針させ危険を回避すること。

7）

5．ウォーレスの南スラウェシ木造船乗船記

１８５６年１２月、アルフレッド・ウォーレス（Alfred Russel Wallace）が、南スラウェシの伝統的は木造船に乗って、マカッサルから約１，５００キロ東にあるカイ諸島、さらに東のアルー諸島へ航海したときの様子が「マレー諸島」（新妻昭夫訳　ちくま学芸文庫[5]）に詳細に書かれています。

「マカッサルの人々の船は季節風（モンスーン）のため、年に一度しか航海できない。１２月か１月、西からの季節風が吹きはじめるとマカッサルを出航し、そして東からの季節風がもっとも強く吹く七月か八月に帰ってくる。」と書かれています。１８５０年代はすでに風上へも航走できるピニシ船が出現していた筈ですが、彼の乗った船は旧式の船だったようです。

ウォーレスが乗った船は約７０積載トン、乗組員は約３０人、いずれもマカッサルおよび近隣の海岸や島出身の若者でした。船主兼船長のほか、もう一人「ジュラガン」すなわち船長と呼ばれる老人が一人いるが、じっさいのところは一等航海士といったところであると観察している。

「年長の４人はジュルムディス、つまり操舵手で、狭い操舵室に２人ずつ６時間交代で座っていなければならない。」「彼等のほとんどは一種の奴隷といってよい。つまり債務者たちであり、年額いくらという名目だけの給金で借金を清算できるまで船主のために働くよう即決裁判所判事から命じられているのである。これは世界中でこの地域でだけ見られるオランダの制度であり、かなりうまくいっているように思われる。」

（１）出帆の様子

「翌朝の三時に船主が乗り込んできた。ただちに錨が揚げられ、四時には出帆した。沖に出てまわりにほかにプラウが見えなくなるとまもなく、老ジュラガン（船長）がなにやら祈りを繰り返し、全員が「アラー・イル・アラー」と唱和する。伴奏に銅鑼が２，３度うち鳴らされ、最後にまた全員が航海中のたがいの安全と幸運を願って「サラマット・ジャ

ラン」と唱えた。風足は軽く海も穏やかな、好天の朝であった。」

（２）航海について

「羅針盤もないのに、夜のあいだもじつに正確に航路を保っている。船主の話しによれば、海面のうねりを見ているのだという。日没時にうねりの方向を見さだめておき、夜間はそれに従って船を進めるのである。」船内で使われていた水時計はウォーレスの持つ時計と較べて１時間に１分も違っていなかったという。

（３）船の構造

「この船はおよそ７０積載トンで、形状は中国のジャンクにどことなく似ている。甲板は前にいくにつれて若干低くなり、したがって船首がもっとも低い。大きな舵がふたつあるが、 船尾にではなく、舷側から左右に５０センチから１メートルほども突き出した頑丈な梁の４分の１ほどのところから下げられていて、甲板はその分だけ船体のなかほどで横に張り出し ている。舵は蝶番で取りつけたりせずに、ラタンの索でしばって吊り下げられているだけなので、どのような位置にも摩擦で固定でき、おそらく操舵が非常にしやすいのだろう。舵棒は甲板上ではなく、２ヵ所の方形の開口部から船内に入り、およそ１メートル弱ほどの高さの低甲板あるいは半甲板とでもいうべきところに二人の操舵手が座っている。船の後部には高さ１メートル余りの低い船尾楼があり、船長室になっている。」

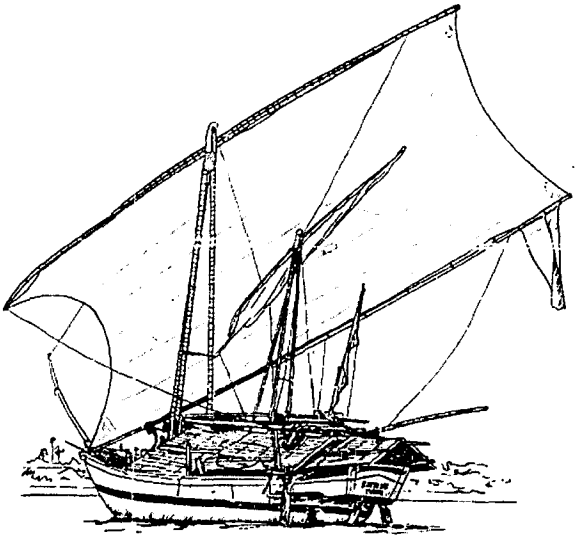


図１－５　パトラニ型とほぼ同型のマカッサルの商船（１９７７年）

Adrian Horridge "The Prahu" Traditional Sailing Boat of Indonesia　xvii[16]

ウォーレスの乗船記の記述とは異なりますが、帆の形はこれに近い。

（４）帆走装置

「この船には帆柱(かりにそれを柱と呼んでよいとして)が２本あったが、それはそれぞれ大

きな可動式の三脚である。ふつうの帆船の静索や後支索（帆柱を支持するロープ）を頑丈な材木で置き換え、そして帆柱そのものを取り外したと想像してもらえば、プラウの船上のようすが理解できるだろう。私の船室の真上の帆柱に取り付けられた横梁の上には、おもに竹で作られた無数の帆桁と円材が置いてある。主帆の桁は長さ３０メートルはあろうかという大袈裟なもので、たくさんの木や竹の材をラタンで器用に束ねて作られていた。この桁にかける帆は長方形で、中心から外れたところで吊り下げられているので、短いほうの桁端を甲板に引き下ろすと長いほうが空中に突き出して帆柱自体の低さを補うことになる。前帆（フォアセイル）形は同じだが、大きさはずっと小さい。この二枚の帆はむしろ製だが、船首の二枚の三角帆（ジブ）と船尾側の一枚の縦帆は綿布製であり、これが私の乗り込んだプラウの艤装のすべてである。」

セレベス民政部時代の思い出

粟竹　章二

私は昭和１９年２月１日、日本郵船の浅間丸にて佐世保を出発、シンガポール、ジャカルタ、スラバヤを経由し、４月１３日にマカッサルに着きました。マカッサルでは終戦までセレベス民政部に勤務しました。偶々今年（2008年）の３月、日本・インドネシア国交樹立５０周年記念行事としてマカッサルにおいて戦時体験を語るシンポジウムがNHKとハサヌディン大学により共同開催され、私の戦時体験をお話しする機会がありました。
この機会に、これまで６０年以上前の体験を忘れないよう書き残した思い出話の中からセレベス民政部時代の思い出話をご紹介したいと思います。

マカッサル到着

スラバヤからジャワ海を渡ってコタバル、コタバルからマカッサル海峡を無事に乗り越えて９日間の旅はついに終わり、佐世保出港以来72日間の旅も最終目的地マカッサルを目の前にすることになりました。

4月13日にやっと目的地マカッサルの岸壁に船は到着しました。船上から見た街は緑が多く、白い壁と赤い屋根が点々と見えるそれは美しい街でした。私は感激で涙がながれ胸がいっぱいになり感無量の状態で立っておりましたら、突然岸壁より「粟竹、粟竹は居るか？」と出迎えの職員の中から大声が聞こえました。思わず目を凝らしますと何と母校帝商の先輩の大村さんが手をふっておりました。私は驚いて駆け寄りますと「おそかったじゃないか、マランで巧いことやりやがって」と到着早々突然にどやされまして、無事の着任を祝ってくれました。私も大村先輩がマカッサルにいるとは知らなかったので
とても嬉しく心強く感じました。

この大村先輩と中村さんとは以後切っても切れない深い友情でむすばれ、兄弟のようなお付き合いが生涯続きました。
もう一人マカッサルには小学生時代からの親友の志田幸盛氏が民船運航会に居りましてとても世話になりました。その夜は中華街のホテルに泊まりまして翌日から海軍の規則、組織、民政の概要その他の講習と訓練が２週間続き、農業要員と一つ所の合宿所に移りました。

合宿講習

この合宿訓練は、我々新任の理事生と農業要員たちがスラバヤ近郊のマランでさんざん遊び、戦争を忘れて心身ともに腐りきって着任したと民政部ではもっぱらの評判で、徹底的に叩きなおしてやるということで正に死の特訓でそれは厳しいものでした。

教官は着任早々の短期2年現役（短現）の斉藤中尉と湯浅中尉のお二人で、海軍経理学校で優秀な成績を収めセレベス民政部部員として着任したばかりでした。斉藤太兵衛氏は、栃木の大庄屋に生を受け中央大学法学部卒業、後に三菱重工に入社してあの三菱重工爆破事件の際は広報室長としてテレビの報道などで大活躍を致し、最後は関連会社の社長をつとめてから亡くなりました。湯浅正己氏は神田の出版社の御曹司で高級住宅地の青山高樹で育ち、慶応大学商学部から海軍経理学校に進みました。後に住友本社に入社いたしましたが脱サラでいろいろな仕事に挑戦しましたが最後は京都で「とんちん亭」という豚料理専門のお店を経営して大いに繁盛いたしましてマスコミの話題になり、テレビ、週刊誌などによく名前を載せておりました。お二人とも癌で亡くなり、私も兄のように慕ってお世話になりましたので悲しい思い出です。

お二人ともに着任初仕事でやる気満々の充実した真っ盛りですから徹底的にしごかれました。訓練日課は次のとおりです。

05：30　起床　直ちに海軍体操、市内マラソン
07：00　朝食。
08：00　軍刀術、射撃などの軍事教練。
10：00　学習講義
12：00　昼食
14：00　学習講義

18：00　夕食
19；00　復習
21：30　消灯

学習講義は各専門科目の課長および司政官、技師などの講義があり、午前中のつかれで眠くて我慢できず、とても辛い思い出があります。

農業要員の諸氏はほとんど田舎から応募してきたので洋式のトイレの使い方から教育しなければならないと湯浅中尉がこぼしておりましたが、この2週間の訓練は後の勤務に非常に役立ち、いまだに思い出として残っております。

勤務着任、部署任命

厳しかった2週間の合宿講習もおわり、農業要員たちはそれぞれの勤務地に派遣されて行きました。私たち理事生は各課に配属されるものと思っておりましたら、全員主計課に配属になりました。私は安田課長の鉱産課にいくと思っておりましたが、後に安田課長から「近く内地転属が決まったので傍において面倒がみられないから、軍籍の課長の主計課長に身柄を預けた」と聞かされ、このことが私のために後々とてもよい結果になったのでした。

当時、主計課長は二宮中佐で、温和な然も優しさの内に毅然とした海軍士官でした。私たちが任命されて間もなく課長は民政府に栄転なされ、後任に小笠原少佐が着任されました。

小笠原孝義少佐は年子のお兄様とともに海軍経理学校を恩賜の時計組で、主計課士官では小笠原兄弟として名を挙げた秀才でした。33歳でセレベス民政部主計課長の重責を担う新進気鋭の青年士官で、やはり優しくて思いやりのある素晴らしい上司でした。

主計課は、民政部という行政機関の大蔵省のようなもので、臨時軍事費、民政会計などのお金を扱う最も重要な部署でした。奇遇なことに課長は深川の生まれで、小学校も私の出た小学校の近くで、同じ深川育ちの江戸っ子どうしとしてとても目にかけていただき、戦後は住まいも田園調布と奥沢と近くであったので、90歳でお亡くなりになるまでお世話になりました。

新任の7人は各係りに配属されました。中村の泰ちゃんは接収住宅の掛かりに、真野さんは珠算の名手の腕を買われ経理関係に配属されました。私は庶務係といわれ内心なにか雑用係のような気がしてがっかり致しましたが、これはあとで聞ましたところ課長と湯浅中尉とのお考えがあってのことでした。

鬼教官の斉藤中尉は甲板士官として、湯浅中尉は主計課部員として武官の課長を助ける重要な部署につき、わたしの直属の上官となりました。

庶務には主任の森岡書記が係長で、先輩藤野理事生とアンボン人のジョセフィンナ・マリア・ツツハトネア（通称ヨッピー）、ハンナというミナハサ美人、オッパス（雑用係）がおりました。

新任理事生各人の部署人事は、2週間の研修中に湯浅さんが各自の適性検査を行い、課長と相談してきめたとのことでした。後年、この人事でいちばん適切だったのは私の部署であったと小笠原さんが言っておられました。

藤野百合子先輩は大阪府出身の才媛で、民政部でも数多くいる女子理事生のなかでも同じ主計課にいる西共枝理事生とともに、仕事のできるトップクラスの秀才でした。湯浅中尉の命を受けて、学校を出たばかりで何もできない私を徹底的に教育するべく、まず数字の書き方から始まり事務一般すべてを叩きこまれました。藤野さんは3歳年上のお姉さんですが厳しく仕込んでいただき、後でとても役にたちました。

ヨッピーは私の隣の机で私より2ヶ月年上ですが、長い髪の毛を三つ編みにしたネシアとしてはもう年頃を過ぎた人でした。色が黒くてあまり美人ではなかったけれどとても頭がよく、オランダの高等教育をうけた敬虔なクリスチャンの秀才でした。語学も7カ国語くらいできましてタイプの腕もすばらしく、日本語も不自由なく話せました。

この天才的に頭のよい二人にはさまれ、凡才の私は負けてはならぬと、ヨッピーには私と話すときはインドネシア語で話すようにとたのみ、まずインドネシア語を自由に話せるようにと頑張りました。話がスムーズにできるようになりヨッピーとも仲良くなって冗談もできるようになると、ヨッピーのことを妹のように可愛がっていた藤野さんはおもしろくなく、よく怒られてヨッピーが陰で泣いているのを見かけました。

とにかく、二人にとっては藤野先輩はとても怖い存在でしたが、その藤野さんとは不思議な縁でむすばれ、後に縁戚になるとは夢にも思わぬことでした。

庶務の仕事にもだんだん馴れまして、司令部や民政府その他官庁に重要機密書類の配達などできるようになり、様子もわかるようになりました。

敷島通り12番地から高砂通り13番地

業務内容も定まりますと仲間7人各自の宿舎の割り当てが決まりました。皆どこに決まるのかワクワクして待っておりますと、なんと私は合宿講習の鬼教官湯浅中尉と斉藤中尉と3人で、海岸よりひとつ手前の民政府経済部の裏門通りの敷島通り12番地に住むことになりました。私は道路に面した日当たりのよい一部屋を戴き、志田君が早速私物の机と洋服タンスを持ってきて引越しを祝ってくれました。湯浅中尉、斉藤中尉は二人とも役所ではとても怖い上官ですが、帰宅すると私を弟のようにとても可愛がって下さり、これがご縁で一生親しくお付き合いをしていただくようになりました。

宿舎の生活は快適で、内地では考えられないような毎日でした。藤野先輩が時折お惣菜など作ってもってきてくれ（湯浅中尉がお目当てなのですが）、コックもジョンゴスもマアマアで、ときおり湯浅さんが得意のお料理をつくりとてもおいしく楽しみでした。

そのうち、主計課長の官舎におられた二宮中佐が民政府の官舎に移られたので、後任の小笠原少佐が高砂通り13番地の官舎に入られることになりました。武官は武官同士の方がよいと湯浅さん斉藤さんがご一緒に入ることになり私も共に行くことになりました。

この官舎は日用品係課長、湯浅さん、斉藤さんそして私、パビリオン（別棟）には大村先輩と中村君が住まうことになりまして6人の所帯で、コック、ジョンゴス、バブ、庭師合せ8名の雇い人がおりました。監督は大村先輩でしたが、この先輩はずぼらであまり熱心ではなく、コックに適当にやられあまりおいしい食事はたべられませんでした。

時田湯浅さん斉藤さんは[illegible]

これが京都の「とんちん亭」の礎だったのでしょうか。

皆さん宿舎に帰ると、課長は父親、湯浅、斉藤両中尉は兄貴分として和気藹々、課長も役所にいるときは怖い上司でしたが、官舎に帰って浴衣に着替えると別人のように優しくなり、あるとき役所でヘマをやり課長に叱られて帰宅後拗ねて部屋にとじこもりブンムクレにムクレておりましたら、課長がドアをノックして「章ちゃんごはんだよ」と呼びにきてくれました。

２軒隣が湯浅・斉藤両中尉と同期の司令部主計課の藤井中尉と、嘱託であった「藤山一郎」こと増永さんの宿舎、その３軒先が政務部長の官舎で前がセレベス新聞の宿舎、右前が三井物産の宿舎でわが家は四つ角の一角でした。裏に４軒先の大和通りの角が第一女子宿舎で、藤野さん「近くなった」とよく遊びにきました。
そのうち湯浅、斉藤、藤井の皆さんは大尉に昇進されまして、藤井さんはよく湯浅さんのところに遊びにきていました。また藤山さんは自分のところのピアノが悪くて、よく我が家のピアノを借りにきましたので、課長のいない昼間に来てくださいと御願いして、昼間だけ使ってもらうことにしました。

パピリオンの二人は野次喜多コンビでとてもおもしろく、ある日夜遊びに行きまして帰ってくるとき課長達にわからないように門のところで自転車を担いでそーっと入ってきますが、マンデー場で二人で大声で本日の成果を話しているのが母屋に筒抜けに聞こえて皆で大笑いしました。このことは後々までの語り草で戦友会のときもよく話題になり笑いの種になりました。

小説、映画などで知られましたカンピリーの「敵性婦女子収容所」は、所管が主計課であったのでよく所長の山地兵曹が連絡にくる際によく豚肉をお土産にもってきてくれました。日頃粗食の我々としてはとてもうれしく、湯浅さんの腕のみせどころで、いろいろなお料理を作って下さいました。

山地兵曹が連絡に来てくれる日を心待ちしておりましたが、イスラム教徒ばかりの厨房では豚肉がきたと大パニックで、大急ぎで役所から帰って豚肉を受け取り、その処置に大変でした。コックは帰ってしまうし、料理の後は厨房の掃除でジョンゴスたちにブツブツ云われタバコなどで機嫌をとったりして、美味しいものを食べたあとは大変でした。

そのときのコックは文句ばかり言って、しかも買出しの金を誤魔化すなどあまり程度がよくなかったので、湯浅さんが替えることを提案して、マカッサル族からトラジャ族に替えました。そうなると他の使用人員も同族に替えないと喧嘩ばかりしてうまくいかないので、ジョンゴス、バブの人員も入れ替えました。

今度のコックは女性でとても気が強くてなかなか言う事を聞きませんでしたが、料理は上手だし豚肉も平気でしかも几帳面でごまかすような事などせず勤勉に働きました。

女性ながらとても威張っていて、他の者を効率よく使い、宿舎の中は整備されていきました。

面白いことは、彼らは完全分業主義で、バブも Tukang tjutju(洗濯職人)と Tukang seterika（アイロン職人）と分かれており、洗濯バブが６人分の山ほどの洗濯を汗いっぱいかいてやっていても片方は知らん顔で昼寝しているし、干しあがって今度は片方が懸命にアイロン掛けをしていても知らん顔して昼寝をしているので、私が、お互いに手伝えば早く終わるのではないか、と言っても知らん顔で、オレは専門家だととてもプライドが高く妥協しませんでした。

万事がそんな調子で、山地兵曹が豚肉をもってきてくれた時などにお客をよんで宴会を催し、前もって「今日はお客だから２時間残業してくれ」と伝えるときは「わかりました」というので安心しておりましたら、時間になると誰もいないのでカンカンになり跡かたづけに大騒ぎしたことがありました。

部屋のなかにタバコなど出しておくと必ずなくなっており、物は全部鍵のかかる引き出しの中に入れないと盗られました。６０年たった今は教育の程度も向上してそんなことはないかと思いますが、当時は日常茶飯事でなつかしい思い出です。

現在は高砂通りの家も取り壊されて立派な家に変わってしまい昔の面影もありませんが、まだまだ懐かしい思い出のたくさんある場所です。

酒保係拝命

昭和19年5月のある日、小笠原課長に呼ばれて湯浅中尉とともに恐る恐る行くと、課長から今まで民政部職員の日常生活用品は経理部や物資配給組合から時々配給される酒保物品を主計課で配っていたがそれでは不完全なので、このたび専従の酒保係を設けてこの仕事に専念させ、業務を充実させると言われました。それで専任部員を湯浅中尉に、専任酒保係を粟竹に、アシスタントとしてヨッピーを任命するといわれました。これは湯浅中尉の提案で、着任当初から私にやらせようと考えていたらしく、やっと私にも責任のある仕事が回ってきました。

酒保というのは商店と同じで、いくら私が魚屋の倅であっても実家は仲買で、住まいと店は離れており、第一魚の名前もわからないような育ちで商いなどてんでわからないし経験もないし、どうしようかと思案いたしましたが、やはり蛙の子は蛙とかで商人の血が騒ぎはじめたのでしょうか、だんだんやる気になりました。いつの間にか仕事も順調に動くようになりました。湯浅中尉は私を引きつれ、経理部、軍需部、物資配給組合など挨拶に行き、台湾銀行に専門の講座を設け、商工課その他、物資に関係のある部署や商社など隈なくまわり挨拶いたしました。

酒保の倉庫を整備し、カウンターや棚を拵え、その間にヨッピーに各課の正確な人員

の把握と地方分県の人数などの書類を整備させ、また政務部第8課、経済部第7課の庶務係に酒保物品受領担当者を定めるように頼みました。ヨッピーはとても迅速にテキパキと処理し、素晴らしい才能を発揮してくれましたが、少なからず藤野さんの援助のおかげと思っています。

就任に際して課長より、任務については皆がほしい品物を常に扱うのだから、不正のないように清廉潔白で皆から後ろ指を指されるような行為を慎み、全てに公平な仕事を期待していると訓示を受けました。このことは固く守り、皆から融通のきかないやつだと悪口をいわれ続けました。

湯浅中尉と相談して、現行は配給原価に近い価格で配給していましたが、酒保独自の資金調達のために、品物により20%から30%のマージンを乗せるように致しました。商業学校卒業のために簿記は得意で、金銭関係と物品仕入れ販売および商品管理、在庫帳簿は完璧なできでした。

今までは品物が配給されるのを待っていたのが、今度は毎日歩いて先方に行くといくらでも欲しい品物があり、お菓子や化粧品、その他諸々の雑貨が集まりまして、今まではときたまの配給でしたが隔日の店開きになり大忙しになりました。酒、タバコ、石鹸、ちり紙などの日用品は原価販売でしたが、その他の品物も種類が増え、余剰利益金もどんどん増え続き、資金も潤沢になって街にある商店などからも品物を仕入れるようになりました。

司令部の主計部員であった藤井さんは特に湯浅、斉藤両中尉と仲がよく時折遊びにきていましたので、湯浅さんから司令部が接収したオランダの敵産物資を酒保にまわすようにと頼み、たくさんの敵製物品を獲得いたしました。ブランデー、コルゲートのパウダーや歯磨き、LUXの石鹸などは少し高いがとても喜ばれました。

傑作は大きな頑丈な木箱に入った物で、黄色い石鹸のような塊が何であるかわからず、これはきっと洗濯石鹸だと思いすこし削って水でこすっても泡がたたず、何かなと考えておりましたらヨッピーが来て、「粟竹さん、これはチーズよ」と言われました。如何に戦時中われわれの食生活が貧しかったかをヨッピーにおしえてしまいましたが、「そうだろうと思ったけどあまりにも不味いのでチーズではないと思ったよ」と負け惜しみを言いました。

現地における日用品物資の生産も向上して潤沢に出回るようになったので、現地採用のインドネシア職員にも酒保物品の配給を始めました。この件はすべてヨッピーに一任しましたら皆とても喜んで、ヨッピーの手伝いを買って出る者もあり大成功でした。やはり原住民は生活物資には困っていましたから他の役所の職員から羨望の眼で見られたとのことでした。

昭和20年に入り司令部からの接収物資もだんだん品薄になり、入荷もなくなり在庫のみになりましたが、司令部も全軍に支給するには数が少なく半端で困っていた品物なので値段も当方の言い値次第で、LUXの石鹸などは現地製と同値ぐらいで仕入れて配給値段は何倍にもなってものすごい利益があがり、酒保の運用基金は莫大な金額になりました。資金があるのだから少しくらい高い闇物資もどんどん購入して原価の30%くらいの値段で配給して喜ばれました。

（中略）

段々と品物も街から消えて昭和20年5月ごろには決まった日用品の配給しかなくなりました。街にでても物が見あたらなくなったので時たまの配給の仕事もヨッピーにまかせ、私は遊軍として湯浅大尉の仕事を手伝うことが多くなりました。

この頃から戦局の逼迫により、いよいよマカッサルも敵の侵攻の目標となり、日本軍はマリノに要塞を築いて戦略物資の集積をはじめました。湯浅さんが主にその任務につき、私もお手伝いをしてカチャンミニャ（落花生油）など播公司にたのんで莫大な価格で集めてもらい、彼らを随分ともうけさせました。彼らはもう日本の敗戦を見越していたのか、足元をみすかして高値をつけてきましたが、背に腹はかえられず、目をつぶって言い値で買い取りました。

それらの物資も戦後マリンプンに搬送して、われわれが抑留中の食べ物になったのですから、厳しい情勢下で食にめぐまれたのも播公司のおかげもあると思っています。しかし、金のためには貪欲な華僑の逞しさには脱帽しました。

戦後聞いたのですが、私のことを可愛がって面倒をみてくれた方は、播家の三男か四男であったようです。1976年にマカッサルを再訪したとき播家の消息をたずねましたら、インドネシアの華僑排斥事件のときに長男は殺され家族は消息不明とのことで、今では播秦建公司の名前も知らない人が多いと聞きました。あの逞しい一家のことですから今ごろはどこかで大会社に発展していることでしょう。

（中略）

颯爽と街を走る

話は前後しますが、酒保係を拝命してから外回りが多くなりまして、自転車では能率が悪いので湯浅さんが交通課の車両管理係の田柳技師にオートバイの支給を依頼してくれました。

最初のオートバイは、小回りが利くほうがよいということで５０cc くらいのドイツ製のバイクでした。これは自転車のようにどこへでも簡単に行けてとても便利に使いました。そのうちパレパレから英国製の B.S.W.が来てこれも長く乗りました。そのあと、英国製のノートンがあるが要領にやるから酒をたくさん集めて来い、ということになってノートン

に乗ることになりました。このオートバイは当時珍しいフットギアでとても重量感があり素敵な車で気に入っていましたが、課長のお使いで民政府に行ったときに空襲に遭い、近くに爆弾が落ちてこわれてしまいました。

最後は特別の計らいで念願のハーレーにのせてもらいました。これは憧れの車ですが、お痩せの私が乗ると様になりませんでした。倒れそうになると周りのインドネシア人をよんで助け起こしてもらうこともしばしばでした。それでも若いあんちゃんが防暑服に戦闘帽、半長靴でマカッサルの町をハーレーで颯爽と走るということは何ともいえない良い気分でした。

（中略）

野戦隊

昭和20年の3月頃からだと思うのですが、戦局も切迫して敵はハルマヘラまで攻めてきました。今度はセレベスだと覚悟を決め緊迫した空気がただよってきた頃、マカッサル防衛のために軍属、一般邦人の方々が多く現地召集されて軍籍にはいり、スングミナサの兵営に入隊しました。

残った者は野戦隊を組織し、隊長は課長の小笠原少佐で斉藤、湯浅両大尉が幹部指揮官として編成されました。隊員は訓練をうけ、空襲のときなどは各員定められた警戒配置につきました。

5月頃から空襲もはげしくなって私は皆と爆撃後の整理などに駆り出されました。スングミナハサの経理部の縫製工場が爆撃をうけたときは、瞬発爆弾がたくさんの若い女工さんが働いている場所に落ちたのでその状況は凄惨を極め、頭、手足、胴体とバラバラになった死体が散乱しているのを、人数の確認のためそれぞれ一組に仕立ててトラックに積み込みまして、ロッテルダム要塞の前のプールに運びました。トラックが何回も往復して私たちも疲れ果てました。最初は軍手をはめて作業をはじめたのですが、それも血と脂のためにヌルヌルになり、異様な死臭で気持ち悪くなりました。日もくれて暗くなり、死体はまだ残っているのにトラックは来なくなりました。3人で現場の番をしていましたがその恐ろしいこと、いまだに夢をみてうなされることがあります。

遂に真っ暗闇になりまして、我慢しきれずに駆け出して、　カッサルまでかなりの距離があったと思いますが夢中で帰ってきました。宿舎でいくら体を洗っても匂いが抜けず、疲れ果てて食欲もなくそのまま寝ましたが、うなされて怖い夢をみました。

そのうち同じ主計課の佐伯嘱託と私はAnggota Pendjaga Api （消防隊）に配属になりました。これはインドネシア語の堪能な佐伯さんと、バイク持ちで機動力のある私を野戦隊と消防署の連絡に当てるためで、消防署は街はずれの浄水場にありました。消防車はたしか3台あったと思います。隊員は本職の消防士でとても勇敢な人たちで、すぐに仲良く

なり、酒保から簿外のタバコなどたくさん持って行ってよろこばれました。

課長は「粟竹は火事と喧嘩が大好きな深川っ子だから適任だ」と、湯浅さんと話していたそうです。お言葉のとおり出動命令がでると嬉々として、サイレンを鳴らして走る消防車の後をバイクで追いかけ、その経過を本部に連絡し次の指令を現場に伝えました。

昭和20年5月の大空襲で、海岸にある軍需部の倉庫とチャイナタウンが大打撃を受けました。そのときの事は忘れられません。

倉庫には、近く前線へ送る予定の戦略物資が満載されていました。おそらく敵の諜報機関の通知によってわかっておったのでしょう。完全にやられ、米や多くの食料、燃料弾薬など貴重な物資が目の前で焼かれました。消防隊員たちは少しでも助けようと懸命に水をかけました。私も消防車の傍らでホースを伸ばしたり一生懸命やりましたが、そのうち倉庫のドラム缶に火がまわりました。周りから熱せられたドラム缶がブルブルと震えだし、膨張して爆発すると中の油が倉庫の屋根の裂け目から天高くふきあげて100メートルくらいまで火の幕が燃え上がりまるで花火のようでした。私たちの分隊は消火の水をとるために岸壁の先に消防車を設置しましたが周りを火で囲まれて、しかたなく持ち場をすてて撤退することになり隊員たちと海に飛び込みました。幸いに引き潮が強かったので早く岸壁からはなれることができました。隊長は流れてきた流木に綱をむすび、全員を集めて綱をはなさないよう指示し、私を流木にむすびつけまして1時間くらいで対岸に泳ぎ着きました。

このとき私は第3分隊で3番目の消防車でした。名前は忘れましたが隊長はブギス族のとても勇敢で信頼のおける人で、彼のおかげで私たちが助かったと思っています。他の2台の消防車は倉庫の陸地側に配置してあったのでそこまでたどり着きますと、皆もう我々がだめだと思っていたらしく、7名全員の無事を喜んでくれました。しかし、貴重な消防車やヘルメット、防火コートなどを失い、当初の判断ミスは悔やまれました。

明け方、グシャグシャのみじめな恰好で宿舎に帰りますと、課長以下皆さんで「もうだめかと思った」と無事を喜んでくれました。

翌日、焼け跡の中華街に行ってみると、播秦建公司の屋敷は跡形なく焼け野原となっておりまして皆さん安否はわかりませんでしたが、後日聞いたところによると、彼らは1週間ほど前に避難したそうで、すでに早くから空襲の情報がわかっていたのかも知れません。

今思うと、物配の課長と公司の長老に昼食をご馳走になったとき、部屋の中に重慶政府の蒋介石からの献金の感謝状が飾ってあり驚いて聞きますと「私は華僑だから中国にも日本にも協力している」といっていました。

播一家の先祖は、元来セレベス海、マカッサル海峡からモルッカ諸島、小スンダ列島を股にかけた海賊の大親分だそうで、当時は南セレベス各地に産物の集荷販売の巨大なネットワークをもつ、経済界の陰の大物でした。

あとで聞いた話ですが、戦前はたくさん流通していたオランダの金貨や銀貨が、日本軍

が駐留してから街の中から消えてしまったそうです。ヨピーに聞くと、以前は銀貨を使用していたのに日本の軍票が出たら消えてしまったと言っていましたが、それが戦後ゾロゾロとでてきましたのは、華僑がドラム缶などに入れて地中に埋めておいたのだと聞かされました。余談になりましたが、彼等の底力に敬服いたしました。

セレベス民政部時代の思い出（1）終わり

以下の原稿は、２０１０年6月１５日山口県宇部市、全日空ホテルでの講演の一部をまとめたものです。「タルシウス」編集部から原稿を急ぎ提出してほしいとの要望もあって、不十分な内容ですがとりあえず報告したいと思います。

沖縄大学法経学部教授・水産学博士
泡盛学会会長、沖縄振興開発協議会委員
上田　不二夫

１．講演テーマ

「国酒（日本の酒）泡盛」

－　泡盛と地域活性化を考える　－

II　講演概要

世間にはあまり知られていませんが泡盛は「国酒」です。２００９年度日本酒造組合中央大会において醸造酒では日本酒、蒸留酒では泡盛が国酒として決議されました。

泡盛の酒としての特徴はいろいろありますが、そのひとつをあげれば、常温で保管する間に熟成しおいしくなるという、世界でも珍しい酒であります。沖縄大学では泡盛を沖縄の食文化と考え、大学の講義に「泡盛楽講座」や「泡盛マイスター養成講座」を開講中です。

今回は泡盛の魅力についてご紹介をし、泡盛を大学教育でとりあげる理由なども皆様にご理解いただきたいと思います。また今回は、今話題になっている「辺野古問題」もからめて「海」の問題にもふれて欲しいとのご要望がありました。泡盛と海というふたつのテーマがまとまればこの講演の意味はあったものと考えます。

III　講演要旨

沖縄大学のテーマ・・「食と環境」

本学は小規模大学ですから、特色ある大学創りを「食」と「環境」、それも海洋環境に特化する方向で模索中です。たとえば沖縄においてダイビング産業は、ダイビングショップの数では全国一の規模にあって、今後の観光産業の柱になる存在です。しかし業界内部を見れば組織化も不十分、事故に対するリスク管理などへの対応策など、大学が側面から支援できる内容も多々あるものと思っています。

１．沖縄の海

現在、国政を揺るがしている「辺野古問題」の背景にあるものとして、沖縄の海の本土とは違った歴史背景が大きいと思う。では何がどのようにちがうのか、四つのキーワードで見てみよう。

（1）・・海はみんなのもの

沖縄の沿海村落は本土と大きく異なり、「漁村」ではなく「海村（かいそん）」であります。本土で普通にみられる漁村は沖縄においては糸満など少数に限られます。漁村と海村の違いは漁業が村の主産業であれば「漁村」であり、農業が主産業であれば「海村」ということです。したがって、海村の場合、海の利用者は専業漁業者ではなく地域の農民であり、地先の海を「海の畑」といった感覚で利用する兼業漁家ということになります。

沖縄でごく普通につかわれる「海はみんなのもの」というフレーズは、昔からつづいている地域社会の「共同体」意識にもとづいており、本土のような漁業権制度にもとづくものではないと思っています。たとえば、読谷村という典型的な農村地域にあっては、沿岸域（サンゴ礁の内側）は村の海、海の畑という感覚であり、昔も今も「くらしの中の海」という位置付けに変わりはないようです。

（2）：漁業法の制定と戦後期の混乱

キーワードの二つ目は、昭和２４年の新漁業法制定時に沖縄はまだ米軍の占領下にあったことです。沖縄の地形そのものが変わってしまうくらいの沖縄戦とその後の米軍の施政下にあって、県民、特に漁業者にとって日本本土の漁業制度が大きく変わることについて関心を持つ余地はなかったといえるでしょう。

本土では、陸の農地改革に匹敵する「漁業制度改革」が実施され、海面利用の主人公は「網元」とよばれる漁業権者から「漁業協同組合（漁協）の組合員」にかわりました。その際、戦後のドサクサ時期であったにかかわらず、網元など旧漁業権者には総額１８０億円もの補償金が支払われています。今の金銭評価でいえば２千億円を超える巨額な補償金でした。その際、まだ外国の占領下にあった奄美、小笠原、北方四島、そして沖縄は適用除外となってしまったのです。

沖縄の祖国復帰時にそれを救済する意味合いで、制度的に不完全な「沿岸漁業特別振興資金」などが制定されましたが徹底した改革にはならず、本土のような旧漁業権補償は適用されなかったということです。

結局、沖縄では海面利用の主人公があいまいなまま現在に至っている、ということになります。このことが、次のキーワード「海にもある米軍基地（訓練水域・空域）」にも影を落としているといえます。

（3）集中している米軍基地

沖縄県下陸上の米軍基地は面積比率で全国一集中していますが、さらに海の上にも「訓練水域」「訓練空域」など、陸上基地を上回る占有の実態があります。

陸上にある基地等の借用料いわゆる「軍用地料」は年間約８００億円ありますが、その１００倍以上の面積を占める米軍制限水域、海上演習場の使用料は「漁業補償」というかたちで支払われ、その額は２０億円程度といわれています。陸上と海上でなぜこのような格差があるのか。その大きな理由は、海上は陸上基地にくらべて補償基準、方式ともに確立されておらず、法的な「補償鑑定規準書」も存在しないという、不完全な漁業補償方式にあると考えられます。

特に訓練空域は公海上にあることから、使用料は「タダ」と聞いています。米軍の訓練空域の下で操業する漁船には過去にも危険な場面があり、一応は操業可能な水域ではあっても「安全な海」とみなすことはできません。

（4）「敷金」の要求

上記３点の歴史背景をふまえて四つ目のキーワードは、沖縄の水産業界全体がこれまで被った損害について、個別補償とは別に業界単位の被害補償を請求すべきであるという考えです。戦後６５年、漁業生産の場を日米両政府へいやおうなしに提供させられたその実績に対して、何らかの評価があるべきではないかということです。

現在でも、金武町漁協の操業実態をみると、共同漁業権区域の中に米軍の制限水域や保安水域などがあって漁場としてはズタズタの状態です。漁場が総合的に利用できる実態は全くありません。戦後６５年間に至るこれら海上軍事基地の安定的な提供は、沖縄県民の大きな犠牲があって実施できたといえます。

先般、沖縄を訪れた日本国総理は「沖縄県民のはらった労苦に対し、感謝とお詫びの言葉をのべたい」と慰霊碑の前で語ったそうです。陸上軍事基地の補償に偏りがちなこれまでの政府の姿勢をただすためにも、沖縄の海人は意思を明確につたえる時期にきていると思います。

陸上の一般社会でも、住宅や店舗借用時には「敷金」が発生します。沖縄水産業界が戦後６５年間にわたって提供してきた海面部分に関しては、使用料の値上げをまったく要求してこなかった有料地主（海主？）としての評価はあるべきでしょう！過去の分を積み上げて「敷金」を要求すべきと言いたいのです。

２．国酒・泡盛と地域活性化

沖縄大学では「泡盛産業」を地域活性化の対象産業と考え、各種の取り組みをしています。泡盛そのものに関してはホームページで「泡盛」を検索してもらえれば多くの情報を入手することが可能です。本稿では講演の主旨を要約してまとめてみたいと思います。

（1） 泡盛の現状

２００９年に開催された日本酒造組合沖縄総会で“日本の酒（国酒）、醸造酒は「日本酒」、蒸留酒は「泡盛」”というスローガンが採択されました。

日本酒の国酒指定については理解されやすいと思いますが、泡盛については沖縄県民自体にもその認識は薄いというのが実情でしょう。　しかし泡盛は、その酒の特徴や歴史背景からみても国酒指定は当然であると思います。

ただし、産業としての現状を見た場合、特に販売面で根本的な問題があると考えられます。

現在、沖縄県内に４８酒造業者があり、これまでに２，０００銘柄以上が販売され、現在沖縄県内で販売されている銘柄だけでも２００銘柄以上あります。しかし、酒造業者を規模別にみると従業員９人以下の企業が６割を占めるという小規模零細の状態であること、対して、出荷額をみると上位の大手３社で４５パーセントを占めるという寡占スタイルになっていると報告されています。

泡盛産業のこのような状況の中で、沖縄大学が大学教育として取り組めるものはないのか、その解答の一部を以下にあげてみます。

（2） 泡盛と地域活性化（沖縄大学の取り組み）

２００５年６月、全国にさきがけて酒関連の学会結成に取り組み、「泡盛学会」を有志でたちあげました。事業内容のメインは学会誌の発行と「泡盛楽講座」の開講です。

沖縄大学では、外部団体である「泡盛マイスター協会」が主として社会人を対象に「泡盛アドバイザー」「泡盛マイスター」養成講座を開講しており、受講者が毎年１００名をこえる人気講座となっています。（泡盛マイスター資格は沖縄県知事認定資格になっている）

この講座と並行して「泡盛楽講座」も開講中ですが、この講座では泡盛学会の分科会テーマである「泡盛と料理」「泡盛と器」「泡盛と健康」「泡盛と販売戦略」等をとりあげて最新の泡盛事情を講義に反映させています。この講座をベースに、今後は「泡盛販売士（仮称）」といった資格認定講座に発展させるべく準備中です。

ここ数年、泡盛の販売は伸び悩んでおり、それも東京など県外市場での落ち込みが大きいようです。今回も講演先の宇部市で聞きましたが、宇部市は宇部セメントと琉球セメント上の提携関係もあって、沖縄の泡盛との付き合いは古いそうです。しかし宇部市内で泡盛という名称は知られていても、酒造所から日常的に供給する酒屋（販売店）までの流通

の組織化がすすんでいないというのが実感できました。

（3）　沖縄大学では、これら泡盛販売店と提携して県外酒屋の泡盛研修を出前講座で請け負うつもりでいます。泡盛は、まだまだ本土では馴染みのうすい酒であり説明を必要とする酒

であることを痛感した宇部講演旅行でした。

宇部市での講演からもどって真っ先に手をつけたのは「国酒・泡盛」のシールづくりでした。沖縄の全酒造所の泡盛にこのシールを貼ってもらうことを予定しています。

この他、１０月から本格的に「沖縄大学食品産業セミナー（泡盛と料理、器、商品開発等）」をスタートさせるべく準備中です。また、沖縄在来種の柑橘類シークァサーを使った女性向け飲料の開発もスタートさせました。

文系の大学が若干理系分野の事業に進出するために、民間企業との「共同研究への取り組み」も開始しました。大学内部の資源（人材・資金・情報等）だけでは不十分であり、今後は外部の民間企業との積極的な提携関係がもとめられています。

（3）歴史情報の商品化

那覇市史資料編の近世資料（第１巻１２）に琉球王府の財政事情を記録した「御財政」が収録されています。「御財政」は琉球王府の収入と支出を記録したもので、１７２８年に作成されたものです。その収入欄に「諸細工並職人上納」と商売人に課していた税金の一覧が載っています。合計２３職種８１３人の職人の中には、豆腐職や饅頭職など現在に引き継がれている職種もありますが、興味を引かれるのは「魚並塩辛職人７８人」の記述です。

全職人の１０パーセント近くを占める魚並塩辛職人（今風にいえば水産加工業者か）は、首里（当時の城下町、現在の那覇市首里地区）に４８人、那覇（当時の下町）に３０人あって、その税額も首里地区は１ヶ月に５５０文、那覇地区は３００文となっています。首里の豆腐職の税額が３３０文ですから比較的儲かる商売であったようです。

「塩辛」という、沖縄において現在ではあまりなじみのない食品が当時は大きな比重をもっていたことを証明する数字でありますが、実は当時の塩辛というのは現代のわれわれが持っている「嗜好品」というイメージの用途だけではなく、「調味料」として中国向け大量に輸出される商品、即ち重要輸出産品でありました。沖縄から中国むけ輸出された塩辛の種類には、スクガラス（アミアイゴの稚魚の塩辛）、アジケー（シャコガイ）、かつおの内臓、トビイチャー（トビイカ）、ウニナシムン（シラヒケウニの塩辛）、スルル（キビナゴ）など多数が記録されています。

輸出量についてのまとまった記録は少ないのですが、1874年（明治７）最後の進貢貿易に積み込まれたスクガラス（アイゴの稚魚の塩辛）は、貿易船２隻分の合計で42.6トンとあり、ウニの塩辛も３トン内外とあります。記録にのらない個人の持ち込み分を上乗せし

たら実態はこの数倍の規模になるかもしれません。

那覇の、泡盛を提供する有名な飲み屋で酒の肴に富山のホタルイカ塩辛がでてきました。

沖縄の観光産業の現場に沖縄の塩辛の姿がまったく見られない現実をどのように解釈したらよいでしょうか。

泡盛と塩辛の関係は、酒と肴としてひとつのカッコでくくられる関係にあります。泡盛学会では、歴史的にも塩辛は泡盛とならんで沖縄の食文化をつくってきた食品であり、またこれからの沖縄の観光事業をささえる柱であると認識して、塩辛産業の復元事業にも意欲をもやしているところです。

エチオピアについて（その４）

石野　赫

「コーヒー・レモニー」
エチオピア流のおもてなし

コーヒーの由来についてはいろいろ伝説があるようですが、コーヒーの木は、エチオピア南部の一地方であるカファ(Kaffa)が原産地とするのが通説となっているようです。「コーヒー」との呼び方もその地名からきているようです。この土地は、標高が1,300mから2,100m、やや酸性を帯びた赤色沖積土壌であり、年間降雨量が1,500mm～2,500mmに達する自然環境が、エチオピアのコーヒーをアラビア種(Arabica)の中でも良質のコーヒーをもたらしているようです。

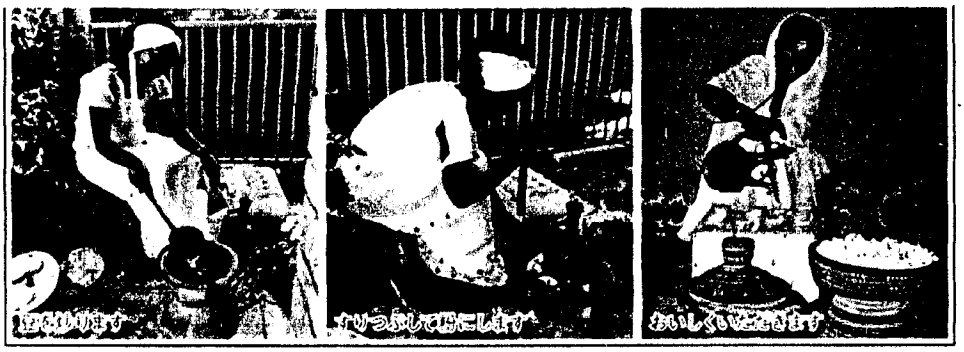
エチオピアでは古来から伝わるコーヒーの飲み方が現在に引き継がれていて、それが人をもてなすための「コーヒーセレモニー」という文化として根付いています。伝統的な習慣であり、コーヒーを飲むことを儀式化した作法の一つと言えます。日本の茶道は、お茶を点て、飲み、それを終えると言う行為に精神的な要素や教養等が含まれる文化的な習慣であり、またこれを通じて他者に感謝ともてなしの精神を表すものですが、エチオピアではコーヒーを飲む行為に同様なものを求めています。

エチオピアでは、数人集まりますと、このセレモニーが始まります。正装して、皆の前でまずコーヒー豆を炒り、そこから立ち上がる豆の香りを楽しみます。その後ポップコーンなどのおつまみと一緒に、コーヒーを楽しみます。同じ豆で一人三杯を嗜むのが一般的で、会話を楽しみながら，かなりな時を過ごすのです。

女性が執り行うものとされていまして、結婚前の女性が身につけるべき作法の一つとされています。冠婚葬祭や、大切なお客をもてなす際などに執り行われています。使用する機器には先祖代々受け継がれてきたものを大切に使っているようです。

道具としては、生豆を煎る七輪と平たい鉄鍋、豆をつく杵（ザナザナ）の小型の臼（ムカチャ）、コーヒーポット（ジャバナ）とカップ（フィンジャル）ぐらいです。

では、順を追って書いてみます。



豆を煎っています。　　搗いて粉にします。　　カップに注いでいます。

1．まず、コーヒーを煎る周囲を青草や花で飾りたてます。
2．松脂や乳香等で作られた香を焚きます。
3．コーヒーの生豆を、冷水を数回取りかえながら、薄い外皮が取れるまでもみ洗いします。
4．この豆を、既に熱してある鉄鍋の上に乗せ、かき混ぜながら、こんがりと焼きます。
5．煎り上がった豆を客に見せ、香を楽しんでもらいます。
6．その後、木製の臼に移し、粉になるまで搗きます。
7．その一方、コーヒーポット（ジャバナ）には、お湯を入れておき、搗いて出来上がった粉をこのジャーに入れて沸騰させます。
8．次に、ジャーを火からおろし、粉が底に沈殿するのを待って、お盆の上に並べてある取っ手の無いカップ（フィンジャル）に注ぎます。
9．そこで、このカップを客に配るのですが、順序は年齢や地位を考慮しなければならない点はいずこも同じようです。
10．三番搾りで出たコーヒーを飲み終わりますと、客は帰り支度を始めるそうです。二煎目はトーナと言い、三煎目はバカラと言い「祝福」の意味があるそうです。

以上のように、このセレモニーは客の前でコーヒーの生豆を煎るところから始め、三杯目が終わるまでには１～２時間かかりますので、その間は、香を楽しみ、おしゃべりをし、お菓子を食べて過ごすそうです。

なかなか優雅なものです。
機会があったらお試し下さい。命が延びますよ。

（完）

ビトゥンの水産事情

長崎　節夫

1．かつおまぐろ漁業の危機

ビトゥンは別名「かつおの町」とよばれるとおりかつお産業とともに興った町です。現在は港湾施設の整備がすすんで漁港というより商港としての役割が大きく、港の周辺は港湾地区としての立地を活かして水産加工工場はじめヤシ油工場、インスタントラーメンの工場、鉄工所、ドックなどが増え、港湾工業地区として急速に発展し人口も増え続けています。

しかし、ビトゥンの町が興る基であったカツオ釣り漁業はいま、カツオ資源減少のために青息吐息という状態です。カツオ釣り漁業の不振は同時にかつお節加工業にも響いてきます。ビトゥンの沿岸・近海にカツオが少くなりました。原因ははっきりしています。巻き網漁船によるカツオの乱獲です。

日本では最近人口減少が問題になっているようですが、ビトゥンのカツオ資源（マグロもふくめて）の減少も大問題です。

日本の人口減少の原因ははっきりしていて、それは一部の政治家などがいうように経済事情がわるいために子育てがむつかしくなって子供を産みにくくなったからではなく、逆に経済事情がよくなったために日本の女性が子供を産み育てるという義務の遂行を怠っているからです。

インドネシアは日本より経済事情はわるいはずなのに人口はふえています。日本では経済事情がよくなり、諸々の社会基盤もよくなって女性が働きやすくなりました。女性は結婚しても家の中で子育てに苦労するより外で仕事して給料をもらうほうがよいと考えます。仕事やレジャーのために車を買って、親と一緒に住みたくないからマンションを買って、その結果旦那さん一人の収入ではとても生活の予算が組めないから必然的に共稼ぎになり、共稼ぎになると子供の世話に手が回らないし、子供がふえたらその分の経費もふえてローンの支払いもむつかしくなります。ということで健康な若い奥さんが子供一人で打ち止めにしたりする。

結婚して子供ひとりでも産んでくれるならまだましなほうで、学校を卒業して就職し、バリバリ仕事をこなして給料も増えると、結婚して子供をつくることなど念頭におかなくなります。ハナから子供を産むことを放棄しているといえます。

人口減少の原因について根本のところを押さえていないためか、昨今の日本の少子化対策というのはかなり見当違いのことをしているように感じます。

問題は日本の少子化ではなくインドネシアビトゥンのカツオ資源のことでした。（カツオ

とマグロは同族として資源的には一蓮托生みたいな立場にあるので、以下カツオ・マグロと並記します）

カツオ・マグロ資源の減少は、カツオやマグロが子供を産む義務を放棄したり子育てがむつかしくなったのではなく、巻き網漁船の乱獲などによって子供が生まれない状況をつくったためにそうなったのです。日本の人口減より深刻な状況です。カツオ・マグロの子供が、成長して親魚になる前に獲られてしまうのです

「乱獲」というのは乱暴な漁獲という意味で、それはどういうことかと言いますと、資源の再生産を考慮にいれない漁獲作業のことです。たとえばカツオ・マグロは一人前に成長して産卵し、その子孫を残すわけですが、その機会をあたえずにまだ幼いうちに根こそぎ獲ってしまうようなやり方を言います。種族絶滅を図るアウシュビッツのようなやり方です。巻き網漁法だけでなくトロール漁法もその部類にはいります。

ビトゥンやメナドの魚市場を見物すると、バスケットや桶に入った体長20センチ前後のカツオやマグロの幼魚をよくみかけます。このような幼・稚魚というのは、どの魚種でもそうですが、まだ泳ぐ力が弱く、群れも密集した塊になっていて網で獲りやすい。魚は成長すると泳ぐ力がついて（つまり逃げ足も速くなって）群れも粗密になり、漁獲がそれだけむつかしくなります。一人前になる前の幼・稚魚の群れは、巻き網で漁獲しやすい。必然的に巻き網漁船は幼・稚魚の群れをねらって捕獲しようとするわけです。

ミンダナオ島南岸にゼネラルサントスという港町があります。セレベス海を挟んでメナド、ビトゥンの対岸にあたりますが、そこはフィリピン随一の巻き網漁業の根拠地です。ゼネラルサントスの港で以前よく見かけたのが巻き網で漁獲されたカツオ・マグロの幼・稚魚でした。10年ほど前からゼネラルサントスの巻き網漁船があの手この手で（たとえば漁船のインドネシアへの便宜置籍などで）インドネシア海域内で操業するようになり、ビトゥンにも盛んに出入りしています。ゼネラルサントスの漁業資本が北スラウェシおよびマルク地方のカツオ・マグロ資源減少に一枚かんでいるのは間違いないでしょう。

まぐろ商売の世界では、まだ一人前になる前のマグロ幼魚が「ベビーツナ」とよばれて缶詰の原料として重用されています。この幼魚は、ほとんど全部が巻き網漁船によって漁獲されたものです。前記のとおり、マグロは幼いほど群れが密集して動きもおそいし漁獲が容易です。それを狙って獲って持ち帰れば缶詰原料としていくらでも売れます。しかし、漁業者がそんなことを続けていたら結果は目にみえています。巻き網の「環網」は網の裾をしぼって魚の退路を断つためのロープですが、巻き網漁業者はこの環網を引き絞ることによって自らの首を絞めているようなものです。

カツオ・　マグロの資源問題といえば、昨今国際的にクロマグロ（本マグロ）の資源減少がさわがれて、先ほども危うくワシントン条約のリストに載せられるのを免れたところです。このときは大西洋・地中海のクロマグロ資源が議論のテーマでしたが、インドネシ

アを含む中西部太平洋のキハダマグロ、メバチマグロも危機的状況にあるはずです。

具体的な対処策として、私の意見ですが早急にクロマグロ、カツオ、キハダ及びメバチマグロの「商取引での体長制限」をかけるべきだと思います。食用であれ加工用であれ、体長 00cm 以下の魚は商業取引を禁止する。これを国際条約で定める。つまりこちらから（日本やインドネシアから）働きかけてワシントン条約でも別の条約でもいいから決めてしまうことです。同時に国内法でも漁法や事業形態にきびしい制限をかけるべきでしょう。

売れない魚を獲ってもしようがない。商取引きで制限をかければ漁獲活動は自然にそれに追従していきます。

日本のカツオ・マグロ漁業関係者から猛反発をくらいそうな意見ですが、日本はじめインドネシアのかつおまぐろ漁業者、関連業界が生き延びるためには、これ以外に途はありません。ビトゥンのカツオ産業もこのままでは早晩燃え尽きた線香花火になってしまうでしょう。

クロマグロをはじめメバチマグロ、キハダマグロなどマグロ資源の問題になるといつもまぐろ延縄漁船がやり玉にあげられて減船（漁船数を減らすこと）の対象になります。しかし、延縄漁船の減船だけでは、（何か他の政治的な理由があるかも知れませんが）決して資源問題の解決策にはなりません。カツオ・マグロ資源減少の原因は、延縄漁船側に 0.1% の責任があるなら巻き網漁船（巻き網漁法）に 99.9％の責任があります。

地中海や大西洋のクロマグロ資源の減少は、日本や台湾のまぐろ延縄漁船の責任というより大西洋・地中海沿岸諸国の巻き網漁船および養殖業者の責任が大きいことを知るべきです。地中海沿岸諸国ではクロマグロの幼・稚魚を巻き網や定置網で漁獲して、それを生け簀で育て出荷販売する方式が盛んにおこなわれています。日本の商社などがからんでいるそうですが、これも資源を残すことを考慮しない（マグロに産卵する機会を与えない）乱暴なやり方で、クロマグロ資源量が急速に減るのはあたりまえの話です。

カツオ・マグロの資源減少問題については巻き網漁業が主犯であることは間違いありません。このことについては一部の研究者などから声のあがることもありますが、不思議なことに業界や行政側からの声はまったく聞こえてきません。坐して死を待つということでしょうか。

ビトゥンを含む北スラウエシ、マルク一帯の巻き網漁業の問題は、インドネシアやフィリピンだけの問題ではなく東南アジア・東アジア全体の問題でもあります。関係の皆様の覚醒と奮起を御願いしたいところです。

2. ムロアジ戦線波高し

冷凍ムロアジ日ビトゥンの重要な輸出品目（移出産物）ビトゥン県内に 20 数軒のム

ロアジを扱う冷凍工場があって、ビトゥンおよびケマ、リクパン、メナド、ベランなどで水揚げされるムロアジが集荷、冷凍加工され、冷凍コンテナに詰められてビトゥン港から船積みされます。

行き先は一応スラバヤおよびジャカルタ。送られた冷凍コンテナの多くはスラバヤあるいはジャカルタの港で外航コンテナ船に積みかえられ輸出されます。輸出冷凍ムロアジの用途はまぐろ延縄漁業の餌、および加工食品原料です。

最近の新聞報道によると、中央政府の方針として冷凍かつおまぐろとともに冷凍ムロアジも輸出が禁止されるようです。理由は「(加工して) 付加価値を高めて輸出しよう」とのことです。たしかに正論ではありますがビトゥン及びその周辺地域のムロアジ漁業者（巻き網漁業）にとっては頭が痛くなる問題です。

もともと、北スラウェシの小型巻き網漁業はまぐろ釣りの餌を供給することによって成長し漁船隻数を増やしてきました。食用としての供給はそのついでということです。正確な隻数はわかりませんがざっと見て北スラウェシ一帯に数百隻。生産量は全漁業種のなかでダントツでしょう。仮に平均稼動隻数を 500 隻、1 隻 1 日あたりの漁獲量を 200 キロとすると 500 隻で 100 トンの漁獲量になります。現在は漁獲量の大部分が冷凍ムロアジとして輸出されているわけですが、「冷凍魚の輸出禁止」となった場合はどうなりますか。食用・加工用としての地元の需要だけでは供給量（漁獲量）を捌ききれず価格の低下もまぬがれない、ということで漁業者側からクレームがついて、州知事は中央政府とこの件で談判する予定とのことですが、さてどうなるでしょうか。

おわり

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、

セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

（2014 年 04 月 20 日）

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

●会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。

●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、

セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

（2014 年 04 月 20 日）

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

●会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。

●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。

編集後記

今号は「スラウェシ情報マガジン」の脇田清之さん、粟竹章二さん御両名の記事を転載しました。脇田さんの「長編記録映画｛セレベス｝誕生の経緯」は北スラウェシに関係の深い記事でもあります。粟竹さん、川口さん御両名からこの記録映画の価値の高さをお聞きしました。(川崎市での試写会に行かれたそうです)。現在スラウェシ島に住む者として、私もぜひこの記録映画を拝鑑したいと願っていますが、願えば鑑えるというものでもないようで、不思議な記録映画になっているようです。

インドネシアで海洋民族といえばブギス民族。大昔から現在に至るまで、インドネシアの海はブギスの海です。脇田さんの秀逸なレポートです。ありがとうございました。

粟竹さんの「セレベス民政部時代の思い出」は、これもまた文字による秀逸・貴重な歴史記録です。川崎市所有の記録映画とちがってこちらのほうはインターネットでいつでも読めるし、本会報でもじっくり読めます。今回は第一部だけ（ただし一部分割愛）ですが、第二部も次号掲載の予定です。

沖縄大学の上田先生が山口県宇部市に講演に行かれると聞いて、講演録の寄稿を御願いしました。上田先生は静岡県の出身ですが沖縄の泡盛にハマッテしまって多忙をきわめているようです。泡盛のルーツは東南アジアの「アラック」酒にあります。沖縄で造られる酒なら北スラウェシでもできるはずだ、平野幹事長や今泉真珠王たちと飲むたびにご当地銘酒がないことを嘆きながらスラウェシ泡盛の誕生を夢見て気炎をあげています。

石野さんのエチオピアシリーズは第 4 回目です。コーヒーにも日本のお茶と同じく伝統の作法があることを知りました。ただしそれはエチオピアのような歴史のある国であるからこその話であると思います。アメリカみたいな歴史の浅い多民族チャンポンの国では、飲み物にしても食い物にしても歴史の重みを感じさせるようなのはありません。アメリカを代表する飲食物といえばコカコーラとホットドッグ。文化の香りのかけらもありません。（アメリカの皆さん、ごめんなさい)。

不肖長崎は昨今のビトゥンのカツオ漁業不振に関して、かねてからの持論を書いてみました。「女性とカツオ・マグロを同列において論じるとは何事か」とお叱りを受けそうですが、水産資源論の理屈をならべただけですからお許しねがいます。（もっとマズイか)

表紙はいつものとおり羽根井さんです。サッカーワールドカップにちなんだ絵ですが、発行がおくれて月遅れの絵になってしまいました。申し訳ありません。

次号は新年の予定です。現地在住の皆さんもぜひ一筆おねがいします。　　（長崎）